

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

菊池 真理

【所属】(助成決定時)

筑波大学大学院 人文社会科学研究所 歴史・人類学専攻 博士課程

【研究題目】

ポスト紛争期スリランカにおける哀悼実践と和解に関する人類学的研究

【研究の目的】(400字程度)

植民地支配、冷戦、グローバル化による矛盾が、世界各地で異なる民族や宗教集団間の暴力や紛争という形で噴出ししている。こうした暴力や紛争の問題に取り組む際に、その原因の解明や解決策が模索される一方で、ポスト紛争期社会における傷ついた社会関係の修復や、既存の政治的・法的制度に代わる新たな価値や制度の再創造も喫緊の課題となっている。本研究は、文化人類学の視点から、スリランカにおけるシンハラ人主体の政府軍と分離独立を目指すタミル人武装組織「タミル・イーラム解放の虎(Liberation Tiger of Tamil Eelam: LTTE)」との間で起きた内戦(1983年~2009年)において、双方から被害を被ったタミルの人々の哀悼の実践を事例に、生存者たちが「和解」を創り出す可能性を提示することを目的とする。国際政治学や国際関係論では捉えきれない具体的で日常的な関係性のレベルで生起する平和や和解のあり方を射程に入れることで、ポスト紛争期社会における社会関係の再構築のプロセスに関するより深い理解を目指す。

【研究の内容・方法】(800字程度)

南アジア地域では、スリランカ内戦の直接的契機となった1983年の反タミル人暴動を含め、1980年代~90年代にかけて集団間の大規模な暴力が頻発した。集合的暴力研究における人類学的アプローチは、暴力の生存者の経験やその後の生き方に焦点を当てる点を特徴とするが、ポスト紛争期社会における和解や社会再編については研究が緒についたばかりである。そこで本研究は、民族問題の政治的解決よりも開発を重視する政府主導の「国民和解」が民族間及び民族内部での「和解」を妨げている点を踏まえ、ポスト紛争期スリランカにおけるタミルの生存者たちによるさまざまな哀悼の実践を民族誌的に記述し、彼らが「和解」を創っていく可能性を提示しようとした。

本研究が採用した研究方法は、現地調査を通じた参与観察及びインタビューによる聞き取りである。スリランカ東部州パティカロア県のタミル人村落において、2016年7月から8月、並びに2017年2月から3月及び8月から9月までの約3か月間、現地調査を行った。第一に、調査村でみられるナショナルな哀悼の実践(軍による記念碑、戦死した軍人兵士の名を村道につける等)や軍事的プレゼンス(軍事キャンプ、軍人兵士による巡回等)を観察する一方で、それらに対する人々の軍事的・政治的な沈黙と、日常的な語りに織り込まれた内戦や軍事的プレゼンスの経験について、観察及び聞き取りを行った。第二に、村人たちが内戦による死者や強制失踪者をどう悼んでいるかについて、彼らの日常生活の観察及び聞き取りを行った。また、「通常の死」をどう悼んでいるかについても参与観察を行い、参照点とした。第三に、調査村のヒンドゥー女神寺院における例祭時(7月~8月)に行われた神託儀礼及び招魂儀礼を参与観察し、強制失踪者をめぐる神託者と村人たちのやり取りを記録した。

【結論・考察】(400字程度)

調査村では、「国民和解」と表裏一体で遂行される国家によるナショナルな哀悼の実践が見られる一方で、村人たちによる哀悼の実践は公的な領域では禁じられ、家族などの親密圏や寺院などの宗教的な領域で行わ

れていた。人々は、亡き人の死／生のかげがえのなさを、日々の家族の暮らしや、儀礼といった神の領域において回復させ味わうことで、その喪失を悼んでいた。彼らは、殺害の裁きを神にゆだねることで怒りから自らを解放して救いと慰めを得る一方で、亡き人の代わりとして養子を迎えて新たな家庭を築いたり、殺害に関与した同じ村に住む村人の家族との付き合いを重ねたりしていくなかで、死者に対する応答責任 (responsibility) を果たしつつ、生き残った若い世代のために生き続けようとしていた。特に、死者を悼むことは、人々が心の平安を求めるなかで必要な作業であると同時に、ポスト紛争期社会における和解や社会関係の再構築の過程において重要な側面であった。哀悼を求める死者と生き残った子どもたちに対する応答責任に導かれながら社会関係を作りなおしていくなかで、「和解」が醸成される可能性があると考えられる。